

# 甲南大学 総合研究所所報

甲南大学総合研究所

〒658-8501 神戸市東灘区岡本 8-9-1

電話 (078) 435-2331 (ダイヤルイン)

第 60 回 総合研究所公開講演会

「中近世堺のアジア貿易と繁栄について」

平成 27 年 5 月 25 日 (月)

講師 吉田 豊 氏  
(堺市博物館学芸員)



## はじめに

皆さん、おはようございます。今ご紹介いただきました堺市博物館学芸員ですけれども、私は、生まれは静岡県の焼津市というところです。同じ港町というこ

ともあって、堺の研究をしてきました。でも、もともとはそうでもなくて、静岡からは大体みんな東京に行くんですけども、関西にやってきたのは、高松塚古墳というものが、随分昔の話かもしれませんが発掘さ

れまして、そういったものを私も掘ってみたいという  
ようなことなどで関西にやってきたんです。しかし実  
際には考古学ではなくて、文献史学の歴史学の研究を  
しております。

今日は少し、甲南大学でなぜ堺なんだという疑問を  
持つてる方もいるかもしれませんが、堺と神戸を少し  
比較した話もさせていただきますので、聞いていただ  
けたらと思います。では、レジュメに沿ってお話をさ  
せていただきますが、向かって左側がこれから20分ほ  
どおしゃべりさせていただく内容になっております。  
そして、ちょっと飽きてきたところにですね、パワーポ  
イントを使ったお話をさせていただきますこうと思います。  
最初のほう、少し難しいところはあるのですが、  
我慢してお付き合いください。

今日の題名が、「中近世堺のアジア貿易と繁栄につ  
いて」ということになっています。堺の中近世、特に  
16世紀ですね、1500年代。ヨーロッパからゴア、これ  
はインド西岸にあるポルトガル領だったところですが、  
今でも大きな都市ですが、ゴアを経由して来日したイ  
エズス会宣教師フランシスコ・ザビエル、有名な画像  
が神戸市立博物館にあると思います、このザビエルの  
報告によりますと、日本の最も富んだ港で国内の金銀  
が集まるのが堺でした。国内の金銀、何か宝石が集ま  
るところというように思うかもしれませんが、昔の貨  
幣は紙製の聖徳太子さんでも福沢諭吉さんでもござ  
いませんでして、金と銀であり、特に中国はこのころ  
から銀を大量に使っております。日本はまだ銅銭も使  
っていた時代なんですけれども、金銀銅ですね、こう  
いったものが貨幣として使われて、この金と銀が集ま  
るところが堺であると。日本中のお金が集まってきて  
いる、そういうふうにザビエルは、ゴア、そしてマラ  
ッカから1549年に鹿児島に着いてすぐに、マラッカの  
司令官への書簡で報告しております。マラッカという  
のは、マラッカ海峡で有名ですが、ポルトガルの植民  
都市だったところなんです。こういった時代を中心に、商  
業都市堺の繁栄をこれから見ていこうと思います。

レジュメに「はじめに」と書きましたが、住吉大社  
を皆さんご存じでしょうか。神戸市内にも住吉神社が  
幾つかありますけれども、一番有名なのが摂津国一宮  
の住吉大社ですね。大阪市住吉区にあります。こちら  
の最大の祭りに、夏越祭（なごしまつり）という祭り

があるわけですが、これが8月1日、旧暦では6月の  
晦日（みそか）にあるんですね。晦日という言い方を  
するのは、旧暦では月末が29日だったり30日だつたり  
して、月によって変わりますので、6月の最終日とい  
うことです。この日まで4、5、6月が夏なわけです、  
旧暦でいいますと。7月になると秋になりますので、  
6月末日というのはまさに夏を越し秋に向かう日で  
す。こういったお祭りが今でも、堺に向かって神輿（み  
こし）行列をしている。摂津国一宮ですから、なぜ大  
阪のほうへ、大阪城があるところ、その昔は難波宮が  
あったりしたわけですから大阪の中心ですね、なぜそ  
ちらのほうに向かわないのか。なぜ逆の堺に、住吉の  
神輿は行ってしまうのか。そういった疑問から、堺の  
まちってというのはどういうところなんだろう、あるい  
は神戸、古くは兵庫津ですね、どういうところなんだ  
ろう、そういうことを私は少し考えました。

## 原始・古代の堺と住吉

一番最初、4世紀、5世紀、6世紀、古い話でなか  
なか『古事記』『日本書紀』くらいしか史料が残って  
ないような時代ですから、はっきりしたことは分から  
ないんですが、神功皇后というやや伝説上の人物です  
けれども、この人が中国、朝鮮半島、特に朝鮮半島に  
出兵をする。百濟・新羅・高句麗、いわゆる三国時代  
ですね。帰ってきたら住吉大社をつくるということで、  
神功皇后と住吉大社とは非常に関係が深いわけです。  
有名な住吉神社ですけれども、対馬、壱岐、筑前博多  
に古社があります。博多のまちは今、山笠の櫛田神社  
が有名なんですけれども、私は住吉神社がもともとの  
中心であったんじゃないかなと考えております。そし  
て長門国ですね、今も下関市内に有名な住吉神社がご  
ざいます。そして、摂津国一宮の住吉神社。こういう  
ふうに見ていきますと、朝鮮半島と畿内、大和・摂津・  
河内をつなぐ線上に、著名な住吉神社があるというこ  
とが分かってくるわけです。では、堺は何なのかとい  
いますと、先ほども言いましたけれども、夏祭りの神  
輿が堺に向かってくる場所がお旅所というところにな  
っています。お旅所ってというのはどういうところか  
といいますと、一番有名なのは、京都の祇園祭のお旅  
所が、今は高島屋のすぐ西側にあるわけですね。神輿  
が八坂神社からお旅所にやってきて、山鉾が、お祭り

のある神聖な場所を巡るわけです。

次に、古代の飛鳥時代あたりに、河内国、現在は摂津・河内・和泉と分かれていますけれども、もともとは1つの大きな河内地域というものがありました。その中から、港をつかさどる摂津職というものを分離します。分離した境界線の南側はどこなのかというと、ちょうど今の堺の中心部になります。堺の中心部に大小路（おおしょうじ）という道路が、今でも通っているんです。小路はいっぱいありますけれども、その一番大きな小路。この大小路から北側は摂津国、南側が和泉国。ただ、ちょっとややこしいのは、もともとは河内国だったんですが、奈良時代からそのあたり和泉国になりましたので、摂津国と和泉国の境界線、こちらのほうにまちができてきます。それで堺という地名になったと。それ以前から住吉大社のお旅所があったと私は考えておりますけれども、お旅所を中心にまちが大きくなってきました。

その後ですね、平安時代になりますと、平安貴族が住吉詣でをするんですけれども、そのときにちょっと住吉大社から足を延ばして、リゾート地としての堺で潮湯をするといったようなことをしているわけです。潮湯というのは何なのかといいますと、神聖なところに詣でた後に、禊ぎや精進落としのようなこととして海水を浴びるというふうにイメージしていただければいいわけです。例えばお伊勢さん、内宮が中心なんですね、伊勢神宮といいますと。しかし、山田のまちに外宮という外の宮がもう一つあります。こちらのほうは山田のまちの中心として、非常ににぎやかな場所になっております。ちょうど住吉大社が内宮で、堺のお旅所が外宮であって、山田のまちが堺のまちと、そういったような対比、位置づけもできるだろうと思えます。ですから、住吉大社のお旅所と関係する開口（あぐち）神社という神社があるんですけれども、ここは住吉大社の外宮というようにも歴史的に呼ばれてきております。

## 中世前中期の堺と自治都市

そうしまして、中世に入っていくわけですが、鎌倉時代にはお寺の梵鐘ですね、これをたくさん堺の東部地域でつくってございまして、堺は現在でも包丁とか自転車とか金属産業が盛んで、かつては日本刀もつ

くっており鍛冶業が盛んでしたが、鋳物業の中でも梵鐘造りですね、お寺の梵鐘をたくさんつくって全国に出荷する港が堺の港でした。

それから、南北朝時代になりますと、南朝側の拠点になります。特に住吉大社はそうなんですけれども、南朝第2代の後村上天皇は住吉大社の行宮、仮の御所ですね、そこで亡くなっております。第3代の天皇がそこで即位して、北朝が攻めてきたのでまた吉野のほうに戻っていくということになりますけれども、南朝の拠点として住吉と堺は非常に注目されていく。『正平版論語』などの堺版の出版物も出ております。出版物は、今は皆さんもう見るのも嫌なくらいたくさん出てるかと思うんですけれども、南北朝時代には奈良や京都の大きなお寺で出版することはあっても、それ以外ではほとんど出版されていなかったのだから、出版があるというのは、都市としては文化が発展してきている証です。ほかの都市にはない現象です。そういうところは、当然いろんな武家が領地として支配して、お城を構えたりということになるわけですし、例えば山名氏清とか大内義弘といった大名が「堺城」というお城を堺につくっているようです。

それからもう一つ、今風に言えば県庁所在地、和泉国は和泉府中、いま和泉市の中心地ですけども、そこが府中という名前のおおりの、歴史的には県庁所在地だったんです。しかしこの山名氏清のころに、堺に県庁所在地、すなわち和泉国の守護所を移していくというようにおこなわれたようです。そして、お城ができるということで、大きな都市になって、そのまま順調にいけば城下町になっていったんだろうと思えます。しかし、現在の堺市を見ていただきますと、城下町にはなっていないですね。神戸市にも、小さなお城は幾つかあるんですが、大きなお城はありません。堺も神戸も港町、商業都市の道を歩むわけです。なぜ堺はそういうことになるかといいますと、3代将軍の足利義満が將軍家の独裁を強めていくのですが、このときに山名ですとか大内、西国の大大名ですね、彼らが京都の近くの堺というところに勢力を持っているのは非常に困ると。特に大内は、山口や下関、博多を拠点にしたんですね。山口や博多と堺をつなぐ道というのは、瀬戸内海です。皆さん、現在の日本の大動脈は東海道ですね。でも、それは京都や大坂に対して江

戸のまちができて以降、江戸と大坂・京都を結ぶ道として東海道ができました。東海道というくらいですから東ですよ、それまでの中心であった畿内よりも東。それ以前は、瀬戸内海が大動脈ということになるわけです。その大動脈を大内が押さえてしまうと、これは困るということで、将軍がいろいろああでもないこうでもない、嫌なことを押しつけて大内を怒らせて、戦争に持ち込んで滅ぼしてしまう。

その後で入ってきたのが阿波国、今の徳島県ですね、そこを母体にする細川氏ということになります。細川は、ふだんは大体京都にいまして、堺にはほとんどやってきません。代官を置くだけです（代官が問題になる場合もありますが）。ですから、地元の商人たちが一生懸命自治を深めていくことがしやすい。堺はよく自由都市、自治都市と堺市では言ったりするんですけども、これはそういう意味なんです。殿様がいない。殿様がいてどうしても殿様のやり方に沿って、そんなに自由はない場合が多いんですけども、ふだん殿様は京都にいて、堺にはいてない。そういう大きな都市というのは結構少なかったのだから、堺は日本史上においてまれに見る自由に商業・貿易ができた都市であり、自治都市になれたというわけです。

## 戦国時代堺の貿易

そしてその後、戦乱がだんだんと大きくなって、戦国時代に入ってくるんですけども、その端緒が応仁の乱。これもまさに東軍が細川で、西軍が山名と大内。かつて堺をめぐる争ったところが、またまたここで争う。このとき、偶然の事件が起きるんですね。細川船が中国、明（みん）の国ですね。当時は、そこに貿易に行く。遣明船、勘合貿易というのを授業などで習ったことがあるかもしれませんが、貿易に行くんです。行ったときはまだ応仁の乱起こってないんですけど、帰ってくる時には起こっています。大内船も行くんですけど、大内船はすぐに博多や下関に戻れますけれども、細川船が、当時は兵庫津がメインの港だったんですけど、兵庫津に戻れない。戦乱で、門司・下関から瀬戸内海を通れない。でするので、平戸あたりからぐるぐる九州の西側、熊本のあたりから鹿児島を通過して土佐沖を回り、和歌山と淡路島の間紀淡海峡を北上して堺の港にたどり着く。そこで明との貿易品を、

荷おろしする。これが一つの偶然ですね。堺が国際貿易港に、このころから急速になっていく。

中国というのはこのころ鎖国政策、海を禁ずると書きますが海禁政策を実施していた。特に日本に対しては、倭寇という日本の海賊が結構海岸部を荒らすので、国を閉ざしてできるだけ貿易は限定的にするというようにしていた時代なんです。しかし、当然陸続きの朝鮮ですとか、もう一つは琉球、このころ琉球は独立した王朝だったんですけども、今の沖縄ですね、琉球王朝が中国と親密な関係を築いていく。そうしますと、堺の商人は琉球に貿易に行くわけです。中国の品物を手に入れるために、琉球に行くのです。そして、琉球も堺も繁栄をしていく。そのすぐ後ぐらいに、ザビエルが「国内の金銀の大部分集まる場所である堺に、商館を設けるのがいい」とマラッカの長官に勧めたように、貿易都市としてにぎやかになっていく。

しかし、このザビエルがやってくることによって、琉球貿易は急速に衰退してきます。なぜかと言いますと、一番大きいのはポルトガルが中国から、いろいろないきさつはあったんですがマカオを借りることができたこと。それまでのインドのゴアとかですね、マレーシアのマラッカとか、これは武力で攻め取って植民都市にしたんですけども、中国はなかなか大国ですから、簡単にはいかない。マカオを拠点に、中国と日本や外国との貿易をする。いわゆる南蛮貿易です。まさにそれまで琉球がおこなっていた中継貿易を、ポルトガルがするようになってしまうわけです。こうなりますと、堺の商人ですね、当然ポルトガルとの付き合いで貿易をしていくんですが、利益がそんなに以前ほど大きくなくなってしまう。

## 安土桃山時代堺の繁栄

そうなりますと、堺の商人自身が中国まで出かけたわけですけども、中国は鎖国政策をとっておりまして、外国は来るな、朝貢貿易以外は来るな。特に、日本はもう来たらだめだと。そうしますと、どこへ行くかといいますと、東南アジアに行くわけです。なぜ東南アジアに行くのかというと、東南アジア方面にこのころ、それまではインド商人などが多かったようですけども、中国の商人、今でいう華僑の人たち、中国商人が東南アジアにいる。

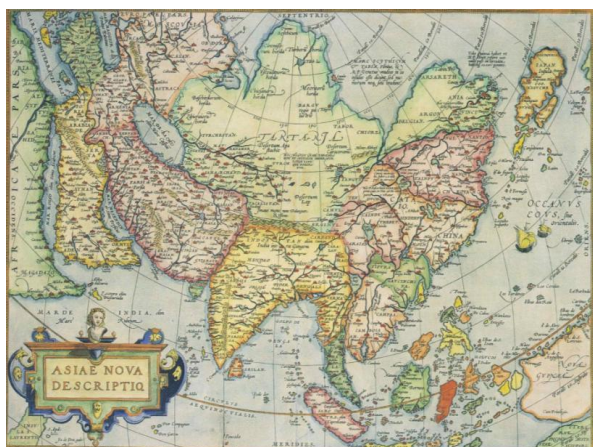
そこで、出会い貿易と言ったりしますが、東南アジアで中国の商品と日本の商品を交換する。日本の場合は、屏風や漆工芸品でありますとか日本刀ですとか銀ですとかが多いわけですが、中国の場合に多いのは生糸と絹織物ですね。シルクロードというぐらいで、古代から絹が圧倒的に多い。重たい物は船で運ぶので、海上の道をセラミックロードと言ったりしますが、陶磁器がそれに次ぐような状態だったと思います。そういうものを貿易商品として東アジアで交換する。それが東アジア、特に北東アジア交易の基本、中国と日本の間の貿易の基本ということになっているんです。そこに、都市として堺のほかに兵庫津でありますとか、博多でありますとかがかかっている。

都市の歴史、あるいは皆さんが住んでるまちの歴史でもそうなんですけれども、なるべくして、しかるべくしてまちができる、都市に発展する。どこかで誰かが、たとえばお殿様が、ここがいい自分はここに住んでみようと言った、そしたらそこが大きなまちになった。徳川家康が、自分は秀吉から追い出されたんですけども、江戸のまちも結構いいところじゃないか、もう江戸に居を構えようと。そしたら、そこが大きなまちになって、今日本の中心の東京というまちになったわけですね。最初は非常に偶然が作用するということが、集落や都市の歴史の場合にあるわけです。そして、堺が貿易の中心になってきます。そういうようなことで、朱印船貿易、そして鎖国へと進んでいきます。

## 16世紀西洋古地図と堺

そうしましたら、ここからはパワーポイントを使って、図版を少し見ていきたいと思います。ちょっと暗くなりますけれども、ご辛抱ください。

こちらはですね、1572年にベルギーの地図製作者で



あるオルテリウスが作ったアジア図ですが、右上が日本です。レジュメのほうに書かせていただいたように、Meaco(都)と書かれているのが京都です。九州のBungo(豊後)とかCangaxuma(鹿児島)とか、本州の右下の細長いのが四国です。そういったものが出てきますけれども、堺はまだ出てきません。豊後はイエズス会の宣教師が大勢いたところなので、出てきます。

次に、ジョルジオの1584年中国図というものになりますが、これは、今の地図と違って上が北ではないん



ですね。上が西で、右側が北になるわけです。中国が黄色で、その下が日本なんです。

次に、日本部分の拡大図ですが、四国がなぜか垂直にあったりするけれども、さらに下にも日本があった



り、ちょっと分からない地図になってます。ここに、西洋で作られた地図の中ではたぶん初めてSacai(堺)という地名が出てきます。あるいは、Facataというふうを書いてありますが、博多の地名も初めて出てきます。ジョルジオという人は、ポルトガル人です。このころ、1500年代の終わりですね、日本にやってきていたのはポルトガルの商人、それからポルトガルの息のかかったイエズス会の宣教師ですので、当然日本情報というのはポルトガルが一番よく知ってしまし

た。

次に、もう一つ、同じころの地図なんですけども、これは1585年テイセラの作で、日本が単独で出てくる



初めての西洋古地図です。これがオルテリウスの地図帳に、地図帳は何版もずっと改定されていってその都度新しい情報が入ってくるんですけども、このとき初めてこの日本図が入ったんです。まだ北海道はありません。朝鮮半島もえらく細長くなっております。この日本図には、堺 (Sacay) という地名があったり、豊後とか鹿児島があります。鹿児島は、来日したザビエルが最初に着いた所で、堺という金銀の集まったところがあると言った場所なんですけど、そういうところが記されている。このテイセラという人もポルトガル人なんです。オルテリウスはベルギー人、このころはまだ、オランダやベルギーが国としては独立してませんで、オランダが北部ネーデルラント、ベルギーが南部ネーデルラントです。オランダやベルギーは、このころ出版が非常に盛んでしたので、地図や地図帳を出版していくんですけども、もともとの情報が日本のことに当時詳しくあったポルトガル情報で、しかも宣教師の情報が多いので、鹿児島とか平戸とか豊後とか、そういうところが出てくるんですね。

### ポルトガル・オランダと堺

じゃあ、ポルトガルの商人たちは日本にどういうふうにやってきたのかといいますと、南蛮船でやってくるんです。これは日本人が書いた南蛮屏風という、堺市博物館所蔵の1双屏風ですが、左側（上側）の南蛮船で日本に上陸すると、右側（下側）のほうに日本人が待っている。



次に、大型の南蛮船から、少し沖合で、日本は遠浅のところが多いものですからちょっと沖合に船をとめて、舢舨（はしけ）のような小舟に積みかえて荷揚げするというようなことになります。それを迎える者が



ですね、イエズス会の宣教師、フランシスコ・ザビエルに始まりますイエズス会の宣教師ということになるわけです。なぜイエズス会がそういうことをするかといいますと、宗教を広めてい



くためには、当然活動資金も要るわけです。あるいは、当時の戦国大名、キリシタン大名というのは貿易に非常に興味を持っていたわけです。領土経営とか戦争にお金が必要ということもあるんですね。ですから、イエズス会というのは布教をしていただけではなくて、貿易も仲介するわけです。ポルトガル商人は、マラッカとかマカオから、季節風の関係もあって、年に1回かせいぜい2回しか来れない。ですから、日本のことはあまりよく分からないわけです。どこの港に着いたらいいのか、誰と貿易をしたらいいのか、そういうことを仲介するのがイエズス会の宣教師です。

次に、これは絵ではなく模型としてつくった南蛮船で、型式でいえばカラック船ですけども、こういっ

た船で日本にやってくる。これは、南蛮屏風でよく出てくるずんぐりとした船なわけです。同じ西洋船でも、



やや細長くなってくるタイプの船、ちょっと新しい分、型式でいえばガレオン船になりますが、これが1600年に豊後の臼杵あたり、大分県ですね、そのあたりにやってくる。太平洋をずっと通ってきたので、もうぼろぼろになっていたんですが、これがオランダから初めて東アジア、日本にやってきた船、リーフデ号という船です。5隻の船団としてオランダを出航したんですが、最後までたどり着いたのはこの1隻だけです。

次に、このリーフデ号がたどり着いた1600年というのは、ちょうど関ヶ原の戦いの直前でした。まだ徳川



家康が大坂城西の丸にいたところです。家康はこの船を見たいということで、堺の港に九州から引っ張ってくるんですね。目的はいろいろあるんですが、例えば一つにリーフデ号の側面に大砲がついてるわけです。商売の船だけれども、軍艦でもあったのですね。防衛し

てるんです、大砲だけでなく鉄砲もたくさん積んで、それを見たいということがあったわけです。もう一つ結果的に大きかったのは、この船にウィリアム・アダムスという人物が乗っていたこと。彼は後に江戸幕府の旗本になって、三浦按針というように日本名になりましたが、この人が徳川家康の外交顧問的な存在になったんです。何か江戸幕府というのは鎖国をするところというように思ってしまうがちですが、それは3代将軍家光の幕閣あたりからでして、家康は貿易をどんどんしたいと。仙台の伊達政宗にも、貿易したらいいというふうに言うような人物なわけですね。ところが、秀吉のころからですけれども、あまりキリスト教を広めてほしくはない、特にスペイン、ポルトガルについては領土的野心も見えるというようなことで、警戒をしていました。それに対して、このオランダ、ただしアダムスはオランダ船に乗っているんですがなぜかイギリス人です、オランダやイギリスは領土的野心はない、貿易だけをしたいんだというように、本人たちは特に区別をして、家康もそれをほぼ信用して、オランダ、イギリスとの貿易を重視していく。イギリスはいろんな事情があって途中で撤退しますけれども、オランダが最終的には鎖国政策の中で、長崎の出島というところに限ってですが、貿易をするということになるわけです。

ただ、なぜか長崎というと出島、オランダ貿易と思いがちなんですけれども、実際は中国との貿易はやはり近いということもあって、それ以上にしていたんですね。中国はこのころ明の国から清の国に変わっていく、明清交替期という時期に入っているのですが、その中で鎖国政策があつたりいろんなことがあって、一概に中国との貿易が継続されたとはいえませんが、大きな目で見ればやはり隣国中国との貿易というものが長崎において盛んにおこなわれていました。長崎に行きますと中華街があり、中国の料理を今でも食べることがあると思います。

## 江戸時代の鎖国と堺

江戸幕府が鎖国をしていきますと、外国船ではなくて、日本の船で荷物をたくさん運ばないといけないということで、図版の菱垣（ひがき）廻船模型のような1本マストの和船になっていきます。外国船は外国人

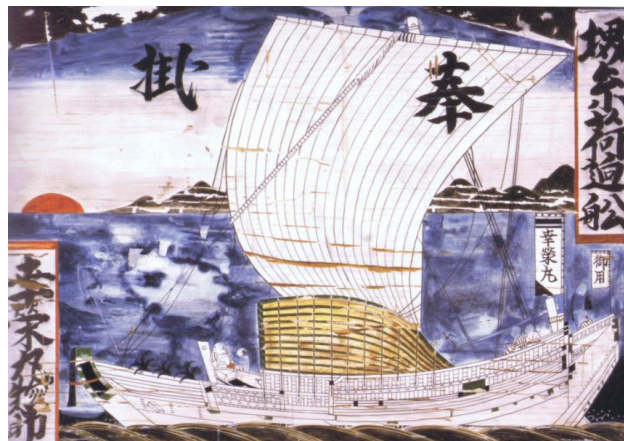
がつくったもので、風に逆らってまでは行けなくてもある程度はジグザグにでも風の影響をよけて走行で



きると。それに対して、こちらの和船のほうは、風でしか行くことができない。技術的には非常に後退したというように思われがちなんですが、実はそうではありません。先ほど言いましたように、仙台藩伊達政宗が幕府の援助も受けて、1613年にサン・ファン・パウティスタ号という船をつくります。そしてノビスパン、ノバ・イスパニア、メキシコですね、その港町アカブルコと仙台、太平洋をパウティスタ号は2往復してるんです。日本人の大工が主になってつくった船で、既にその時代太平洋を2往復もしてるということでした、決して日本の技術が劣ったのではないわけです。これは、むしろ荷物を多く積むことに特化して、少しでもたくさんの荷物を積むと。特に、江戸のまちはだんだん大きくなってきたけれども、まだまだうまいお酒がない、しょうゆもない、何も無いというような時代で、上方（かみがた）からどろどろどろどろ荷物を江戸に運ばないといけない。そうすると、少しでもたくさん積めるような船をつくらうと。そのためには、帆はたくさん要らないと、こういったようなものになってきました。この菱垣廻船というのは、最初に堺の商人が大坂と江戸の間を往復する船として開発したものです。最初はですね、堺の商人のほうが前代、戦国時代以来の貿易商人を引き継いでおりました。

次に、こちらは「堺糸荷廻船」と書いてあるわけですが、先ほどの菱垣廻船と同じように、荷物を多く運んだものです。この、荷物が落ちないように垣根のようなものを高くつくります。菱垣廻船は側面

の垣根のところが菱形になってるんですが、糸荷廻船のほうは普通の格子状になっております。どちらも一般的な和船、千石船に近いです。糸荷廻船と書いてありますように、糸の荷物を運ぶ。糸って何のことかという、中国の生糸、絹糸のことですね。ですからこれは、瀬戸内海を通る船です。堺商人は、徳川家康のころから糸割符商人の筆頭として、長崎に輸入された生糸をずっと運んできておりました。図版は、江戸時代後期の瀬戸内海の神社の船絵馬を、堺市博物館で模写させてもらったものなんですけれども、「御用」船ということですね。幕府の許可を得て運んできています。江戸時代になりますと、先ほど言いましたように東海道ですね、主な航路になるわけですが、当然瀬戸内海もですね、それに匹敵するような重要幹線、重要航路だったわけです。これについても、堺の商人が



関係している。ここにはたまたま描かれてませんが、船絵馬にはよく住吉大社も描かれています。海の神様ということですね。住吉と堺とは切っても切れない関係が昔からありましたので、堺糸荷廻船もそういった流れの中の一つのものであるというようにご理解いただけたらいいと思います。

## 住吉大社と堺

次に見ていただきますのは、住吉祭礼図屏風です。南蛮屏風と同じように、6つに折れ曲がった6曲1双屏風で、その左隻、住吉側です。これの左上に、住吉大社が描かれております。神輿がですね、住吉大社は神功皇后と住吉三神で、4神4社あるわけですが、ここでは神輿が4つとも堺に来ていたようです。その先頭のほうを、行列がずっと堺のまちに向かっていく。神輿は紀州街道、今チンチン電車、路面電車ですね、電車が通っている紀州街道を堺に向かいます。





次に右隻、こちら側が堺側です。先ほどの行列が左端あたりからずっと安立を通りまして、堺のまちに入ってくる。現在、安立町の南側までが大阪市、そこか



らさらに南側は堺市というふうに、市が分かれております。なぜ分かれているか、その境、市の境がどこかといいますと、大和川なわけですね。私は淀川のすぐ近くに住んでいますが、昔からの川ですとそれなりに対岸との交流も古くからありますし、水は必要なものですから川は非常に大事になるんです。しかし、大和川の場合ですね、大阪の柏原市から下流側ですが、元禄時代の終わり、1704年に付け替えられたんです。それまでは大坂城のほうに流れ込んでいて、淀川、大川ですね、それと合流して非常に氾濫をしていた。河内平野が洪水になると。これは困る、お米がつかれない、畑作ができないということで、付け替えをするわけです。どこに付け替えたのかといいますと、住吉と堺の間に付け替えた。それまで住吉大社と堺というのは、一つの私の説であり、平安時代の堺のところで述べましたけれども、伊勢の内宮と外宮のような関係で一体のものであった。ところが、付け替えなどで徐々にそうではなくなっていく。安立と堺のまちの間に小さな川がありますけれども、これは狭間川（浅香川か）という川です。この川のすぐ南側に、後に付け替えられた大和川が通ります。ここから浜に沿って進み、右端でまた紀州街道に合流して、最終目的地が住吉大社お旅所ですね。宿院というところにあります。

この祭りが現在は8月1日、かつての6月晦日、次の日から秋になるということで、夏越しの祭りという

ように呼ばれたお祭りが今でもおこなわれています。堺まで神輿が来るのにはいろんな理由があるでしょうけれども、特に戦国時代ですね、堺のまちは大きくなってきたのに対して、そのころは大坂のまちがちょっと難波宮の後は停滞していた時代ですので、大坂へ行くより堺に行くほうがいいと思ったのかとも思うんです。しかし実は、それ以前からずっと延々と堺に入ってきております。大坂が繁栄しようがしまいが、堺のまちにやってくる。大坂にはこういうお旅所はなく、堺にはある。右隻堺側の下のほうに、行列をする人たちが大勢描かれてるわけですがけれども、この行列というのは、堺のまちの人たちがしている練り物行列、仮装行列なんですね。一方、住吉側の行列っていうのは一番先頭に猿田彦という天狗のようなお面をかぶった人ですね、この人が先頭で行列が続いてるんですが、これは住吉大社側の神事行列です。京都の祇園祭でいえば、八坂神社の神輿が高島屋の西側にですね、やってくる行列というふうに思っていたらいいと思います。堺側がですね、祇園祭でいえば山鉦を大きく繰り出す行列、堺では練り物、特に仮装行列が中心になっております。皆さん祇園祭というところのほう、山鉦が出るほうを祇園祭というふうに言うわけですが、本来の祭り、神事という意味でいえば、八坂神社の祇園祭。住吉祭でいえば、左隻側の神事行列と。しかし、堺のまちの人たちにとっては、仮装行列のほうが楽しい、にぎやかだということになるわけです。

次に、南蛮人風の仮装行列の部分を拡大しましたが、こういったことをしていた堺のまちの人たちもいるわけですね。



これ、最初はイエズス会の宣教師かなと思ったんですけども、イエズス会の宣教師

は黒と白で、このような赤い服は着てません。ですから、イエズス会の宣教師、ルイス・フロイスとかガスパル・ビレラとか、堺にも数年間滞在して宿泊してましたので、堺の人たち、記憶はあると思うんですけれど

ども、ちょっとごちゃごちゃになっているかと。イエズス会の宣教師のような、ポルトガルの商人のような格好をした人たちが、鎖国政策の時代でもう宣教師はいなくなっているから屏風なんですけれども、この屏風の中に描かれているというようなことになります。

## 兵庫・神戸と堺

次に、最後の屏風です。今日はですね、少し神戸と堺のこともお話しさせていただくと「はじめに」で言



いましたけれども、こちらのほうで見ていきたいと思っています。これは南蛮屏風よりも少し後、江戸時代に入ってから屏風であり、摂津名所津図屏風といえます。これも左右1双あります。この右隻の一番右端に堺の港、その上に堺のまちが描かれております。そこから左に住吉大社、四天王寺。この五重の塔は、四天王寺の五重の塔ですね。四天王寺の下あたりが今宮戎神社になります。そしてこの屏風の左側が最初、私はよく分からなかったんですけど、先に結論言ってしまうと、尼崎のまちなんです。じゃあ大坂はどこなんだろう。淀川の河口を左上に遡っていきますと橋があって、さらにもう一つ、その先にもう一つの橋、難波三橋、3つの橋なのかなと思ったりします。その右側が、東横堀川のあたりになるのかと思います。大坂は左上の隅に、なぜか小さく描かれている。さらになぜか、大坂城が描かれていない。これ、かなり意図的なんです。後で左隻を見ていただきますが、尼崎城も描かれてませんし、明石城も描かれてない。お城嫌いな人が注文した絵なんだろうと想像できます。下部は大阪湾ですが、いろんな船が行き交っています。帆の模様でどこの船だとか分かるものも幾つかあります。

次に、右隻屏風の尼崎のまちを拡大したものです。細かく言えば、上のほうが大物（だいもつ）、下のほ

うが尼崎という区分はあるんですが、大きくいえば尼崎のまちです。当時は材木というのが大きな商品、徳島側、阿波国とかから船で運んでくる商品ということで、堺にも、堺



の港のところに材木がたくさんありましたけれど、尼崎のまちにもたくさんの材木が置かれているかと思っています。

次に、向かって左側、左隻です。堺からずっと四天王寺、大坂、尼崎とありましたので、その左側ということで、どこか想像がつくかと思えますけれども、最初は中央が和歌浦ではないかというような推測も



あったりして、ちょっと分からなかったんです。しかし、これは和田岬っていう岬でして、中央は兵庫津というですね、兵庫の港ということになります。このすぐ東隣が神戸村でして、神戸市になっていくことになります。右端から見ていきますと、まず西宮神社があって、その左あたりに塩焼きの窯があったりして、歌に歌われているような地域、西宮から芦屋にかけての地域がずっと沿岸に続いていきます。

次に、これが兵庫津部分の拡大図です。兵庫津はご存じのように、平清盛が福原の都とともに開いたところなんです。神戸市はですね、兵庫県の県庁所在地であるんですが、なぜそうなったかという、幾つか偶然があるわけです。一番最初のころは多分清盛がここに港をつくらうとか、日宋貿易をここでやろうとかいうようなことで、拠点をここに定めたのが、幕末には開港地になり、現在の大きな神戸市になる、そういうようになったところだったと思います。堺の場合は、先ほ

ど言いましたように住吉大社のお旅所がまずできる、そして応仁の乱で兵庫にかわって国際貿易港になる。



そういった幾つかの偶然、人間の人生でいえば運不運、自分ではどうしようもないわけですね。後で振り返ると、ああ、あのときああしたからこうなったのかというようなことが分かるわけですが、都市の歴史にもそういう部分があるのかなと思っております。

江戸時代の幕末において、堺を開港するか兵庫を開港するか、江戸幕府も明治政府になってからも紆余曲折があったんですが、堺は天皇陵が近かったりする関係で、外国の人にあまり足を踏み入れてほしくないということで、兵庫津を開港するわけです。ですので、兵庫県という県がつくられまして、でも市制町村制で市ができるまでにはですね、兵庫津は日本人がもういっぱいいるので居留地がつかれないということで、東隣の神戸という村に居留地をつくることに。そしてそこが大きくなって、神戸市になった。ですから、兵庫県神戸市ですね、兵庫区という区がありますけど、そのようになっていきます。似たようなことが神奈川県にもありまして、神奈川という宿場町に港をつくらうとするんですが、人がもう大勢住んでいるので隣の横浜というところに居留地をつくりました。ですから、神奈川県横浜市。そして兵庫区同様、神奈川区という区が横浜市に今でもあります。

以上、私の発表をさせていただきました。何かご質問があればお受けしたいと思います。お願いします。

○司会

質問がないようですので、先生の方からもう少しお

話しをお願いします。

○吉田氏

たまたまパワーポイントの最後に、環濠都市堺のまちの航空写真をちょっと示しているんですけども、先ほど自由都市、自治都市って言いましたよね。それは制度上、概念上そういう部分があったわけですが、実際は堺だけではなくて、例えば兵庫津の場合でもいくつか周りを区画するようなものがあったり、博多の場合もそうなんですけども、堀が周りをめぐってまして、兵庫にしる博多にしる堺にしる、そういうものがあったということがあります。

兵庫の場合に、もうちょっとだけ補足させていただきますと、明治8年になりまして、兵庫県というものが固まってくる中で、実は堺県という県もあったんですね。堺県は、でも残念ながら、大阪府に吸収されてしまったんです。しかし、兵庫県は吸収されませんでした。神戸というのは摂津国でしたから、大坂と一緒に何ら不思議がない地域なんですよね、大坂と一つ。堺は、どちらかという和泉国ですから違うんですが、堺県と一緒に、兵庫県は独立して大阪府に入らない。独立するどころか、播磨国の人たちはちょっと嫌がるかもしれませんが、姫路を中心とした播磨国も兵庫県に組み入れまして、県庁所在地の神戸市は、兵庫県の中では随分と南東側の端っこにあるわけです。それはひとえに幕府としても明治政府も兵庫津、実際は神戸村ですけども、兵庫を開港地に選んだから。この兵庫、神戸を中心として兵庫県を盛り立てていこうということに。堺は残念ながらそういう開港地にならなかったもので、堺県はつかの間の県でした。大阪府の中で大阪市と堺市で現在もいろんなことがありますし、甲南大学と堺も海でつながっているわけですし、いろんな歴史があるということを知っていただけたらいいなと思っています。

※この講演録に図版掲載した資料は、全て堺市博物館の所蔵品であり、同館発行の図録等から引用したものです。